
正社員たけし

ごはんライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正社員たけし

【Nコード】

N3284T

【作者名】

ごはんライス

【あらすじ】

メタ的なコントです。

自慰シーンがあるため、15禁としました。

(前書き)

前書き県に昔住んでいた。

たけしは、株式会社に勤務する正社員だ。35歳である。妻と子供三人とプリン市にある住宅街に住んでいる。月収は40万。

ちなみに、作者ごはんライスは、株式会社に勤務するアルバイト。たけしと同じ35歳。実家で両親と暮らしている。月収は9万。アルバイトのかたわら小説を書いているが、まだデビューしていない。

とほほほほほ。書いていて情けなくなってきた。

いったいオレは何をしているのか。たけしは社会的成功を収めているというのに、オレは裏街道を歩いている。

しかしまあ嘆いて状況が変わるわけではないゆえ、地道に頑張るしかない。

ちなみにたけしはセックスを女房としてる。女のいないオレはオナニーしか道はない。

オナニーにはいい点とダメな点と両方ある。いい点はラクな点。ダメな点は迫力のない点。

ともかくとして、今日もオレは自分のちんぽをいじってる。

「今頃たけしは女房とばんばんやってるんだろなあ。くそ」

たけしの女房はロリ華という名前。ロリ顔で巨乳でもろオレの好みだ。

「チキショー」

すこすこすこすこ（↑ちんぽを上下にこすってる音）

「セックスしたいセックスしたいセックスしたい」

しかし、オレはプロ作家になるまでは女禁止にしたのである。

「うおー！ー！ー！！」

勢いよすぎ、精液が顔にかかる。

「ひっ汚い！」

とほほほほほほほほほほ。

オレは、泣き叫びたい。何という世の中だ。神も仏もないのか。そのころ、たけしは、家族でバーベキューをしていた。

「パパあ。お肉焼けたあ？」

「もうちよつと待ってごらん」

「早く食べたいよう」

「あなた。お皿とって」

ほほえましいヒトコマである。泣きたいくらい平和なワンシーンだ。

そのころ、オレは、竹刀で素振りをしていた。

「正社員死ね！ 正社員死ね！ 正社員死ね！」

泣きながら竹刀をぶんぶん振る。

かなしき格差社会。

舵取りのない泥の船はどこへゆくのか（桑田佳佑のソロ曲より抜粋）

あたりは暗黒の闇（奥田民生の最近曲より抜粋）

オレは悲しくて悲しくて、竹刀を放り投げる。くそ。女がほしい。

部屋に戻って、ふて寝した。もういいもん！

夢の中で、色っぽい女が裸で迫ってきた。

「ねえん。おコメちゃあん。ねえん」

「あのその。ふがふが」

オレは興奮してちんこがギンギンになってる。

熱い。熱いよ！！

「おコメちゃあん。キスしてえん。ねえん。キスしてえん」

「あのその。ふがふが」

たけしはその頃、バーベキューを終え、子供たちがリビングでテレビを見てる間、ベランダで並んでいた。

「あなた。キスして」

「ああ。かわいいね。おまえ」

「あなた。好き」

「オレもだよ」

子供たちは、親のいちゃいちゃしてる姿を見ながら、うざいなあとちょっと思ってた。

その頃、オレはまだ夢の中。

相変わらず、女に迫られてる。

「ねえん。おコメちゃあん。胸触って。ねえん」

「ふがふが。あのうそのう」

夢の中でまでオレは奥手である。

思い切って、胸を触ってみたら。

ぼよよーーーーーん。

弾力ではじき飛ばされた。

「ぐはーーーーー」

後方数メートルぶっ飛び、壁に激突。
意識を失った。

「どこだ。ここ」

気づいたら、オレは個室にいた。ピンクの照明の狭い部屋である。
「はあ。ここは風俗店だな」

ベッドの上に座るオレ。しかし、きよろきよろ見渡す。嬢がいな
いじゃないか。

「おかしいなあ。準備してるのかなあ」

冷蔵庫があったので勝手に開けてジュースとか飲む。

十分経っても誰も来ない。

「どうなってんだ」

ドアを開けてみた。

すると、そこはベランダになっていた。

「きゃっ誰ですか」

「え」

何とそこには、たけしと妻ロリ華が。

「家宅不法侵入だ。おい。おまえ。警察に通報だ」

「わかったわ。あなた」

「おいおいおい。何言ってるの。こら」

オレはおろおろする。

何だこれは。

夢の世界と小説の世界が混ざってこんなおかしいことになってしまったのか。空間がねじれてしまったのか。

このままでは逮捕されると思い、オレは、一生懸命目を覚まそうとした。目を覚ませば、助かるかもしれない。

しかし、全然同じ。

たけしが、オレをにらみつける。

「あんた。何で我が家にいるんですか」

「いや……そう言われても……」

二人、沈黙になる。しばし。

「あのさ」

「ん？」

「あんた、作者だろ？」

「あ？ わかったのか」

「まあ何となくね」

「ふうん」

オレはたけしにタバコを一本放った。

「せんきゅう」

「ああ」

オレはたけしに火をつけてやった。オレも自分のたばこに火をつける。

「ふー。しかし難しいよな」

「何がよ？」

「小説さ」

「ああ。あんたの仕事か」

「いや厳密に言うとおまえの仕事でもあるんだぜ？」

「ああ。そりゃそうだな」

「おまえさ。面白くてヘタクソな小説と、巧くてつまらん小説、どっちがいい？」

「あ？」

たけしはしばらく考える。

「難しすぎるぜ」

「選べよ」

「そうだな」

たけしは、無難な回答をした。

「読者に任すさ」

オレは納得がいかない。

「読者がへばかったらどうすんだ」

「それも運命さ」

「くう」

妙に達観してやがるな。これが作者と小説キャラクターの違いだろうか。

しばらくして、パトカーがやって来た。

オレは手錠をかけられた。

「おい。行くぞ」

「たけし。ロリ華と幸せにな」

「ああ。あんたも刑務所から出て、プロ作家になれよ」

オレを乗せ、パトカーは走り出した。

しばらく走ったところで、後ろから乗用車が時速100キロで走ってきて、パトカーを追い抜いた。

「うぬう。あの野郎。警察をなめやがって」

パトカーも時速100キロ出し、追った。

オレはこんなカーチェイス経験したことないので怖くて怖くてならない。対向車にぶつからないか、ひやひやするが、警察は慣れたものだ。上手く避けながら走っていく。

犯人の車は対向車にぶつかりそうなので避けたら、ガードレールにつつこんだ。

車は炎上。犯人はよれよれになり、中から出てきて、走った。

警官もパトカーから降りた。

「おい。お前、パトカーで先回りしてろ。挟み撃ちだ」
「了解」

まるで映画を観ているようである。

すると何てことだ。前に四角い大きな画面があり、そこから大勢の観客がこちらを見てる。観客の周りは暗がりだ。

「マジで映画なのか！ オレはいつの間にか映画の登場人物になっ
てしまったのか！」

警官が小声で、お前が主役だぜ、とそっと耳打ちする。

プレッシャー（ビリー・ジョエルの昔の曲のタイトル）

とほほほほほ。

オレはしょうがなく、手錠をかけたまま、走って逃げた。主役ならそれくらいしろと、警官に怒られたのだ。
ガッデム！

どこが「正社員たけし」なんだ！

(後書き)

今は、後書き府に住んでいる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3284t/>

正社員たけし

2011年5月16日22時56分発行